イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第一巻　怒濤の二学期のはじまり

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　イケメン教師の過激な水着
■海老沢薫BLOG
■海老沢薫Web連載小説

※海老沢薫BLOG
http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/
・・・サイドストーリー『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「イケメン教師の受難　伝説の水泳大会篇

第一巻　怒濤の二学期のはじまり」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

二十五歳のイケメン高校教師、三神真琴は、初めてクラス担任を任された一学期、クラスの生徒達の陰湿な罠に嵌まり、あろうことか彼らの奴隷になってしまった。

夏休みもクラスの生徒達の命令で毎日学校に登校し、校庭などで辱めを受け続けた真琴。

もう高校教師なんて辞めてしまいたい、そう本気で思う真琴だったが、弱みを握る生徒達はそれを許さず、哀れなイケメン教師は憂鬱な面持ちで二学期を迎える。

二学期が始まって二週間が過ぎた頃、真琴の高校では毎年恒例の水泳大会が開かれることになり、雲一つない青空の下、校庭の隅にある屋外プールには大勢の生徒達が集まっていた。

するとそこへ、場違いな極小ビキニを穿いたイケメン教師が現れ・・・。

「ウォッー、あの水着なんだよ！めっちゃエロいじゃん」

「どうせ三神先生は自慢の体を俺達に見せびらかしたいんだろ」

「もう〇〇があんなに膨らんでやがる。あんなのが教師だなんて泣けてくるぜ」

「キャッー、三神先生の水着ヤバイ！これじゃあ興奮して水泳大会に集中できないよ」

「今日はたっぷりと目の保養をさせてもらおうっと」

「三神先生、おもいきって裸になればいいのに」

生徒達はイケメン教師の水着姿に興奮し、プールサイドは騒然とした雰囲気に包まれた。

同僚教師達は、教師にふさわしくない極小ビキニを穿いたイケメン教師を誰も咎めようとはせず、むしろ面白い見世物として水泳大会を大いに盛り上げてくれることを期待した。

而して、水泳大会はついに始まり、屋外プールでは生徒達の熱戦が繰り広げられた。そんな中、プールサイドに佇む真琴の元にクラス委員の相葉が近づいて来て、この後のクラ

ス対抗四百メートルリレーに出場予定だったクラスメートが体調不良で急遽出られなくなったため、代わりに出場するよう命じる。

クラスの生徒達に逆らう事のできない真琴は仕方なくその命令を受け入れ、リレーで百メートル背泳ぎを泳ぐ事になった。

クラス対抗四百メートルリレーが始まると、真琴のクラスの生徒達は二位以下に圧倒的な差をつけて泳ぎ、三番手の真琴へと繋いだ。

「先生、俺ら一位を狙っているから、絶対に足を引っ張らないでくれよ。もし先生のせいで負けたら許さないからな」

アンカーを務める相葉にそう脅された真琴は全力でプールの中を泳いだ。

そうして、真琴が半分の五十メートルを折り返した時、突如プールサイドにいる女子生徒達の悲鳴が轟いた。

なんと、イケメン教師の水着が水中で溶けてバラバラになり、下半身が丸出しになってしまったのだ。

全力で泳ぐあまりその事に全く気づいていない真琴は、プールサイドにいる全校生徒や同僚教師達に何もかもを晒しながら背泳ぎを続け・・・。

クラス委員の相葉達が企てたイケメン教師の陵辱ショーはついにその幕が上がり、学園の歴史に永遠に刻まれる伝説の水泳大会が今始まろうとしていたのだった。

■第一章　イケメン教師の過激な水着

九月になり高校は二学期のはじまりの朝を迎えた。真夏と変わらぬ暑さが続く校庭には、まだ夏休み気分が抜けない様子の高校生達がけだるそうに登校してきていた。そのどこか憂鬱そうな顔を見ていると、きっと多くの生徒達が二学期のはじまりを疎ましく思い、夏休みがまだ続いて欲しいと願っているのが良く分かった。

そして、そんな生徒達以上に憂鬱な表情を浮かべている一人の教師がいた。その若いイケメン教師はまるで処刑台へと連れてこられた囚人のように、この世の終わりのような顔をしていた。

「三神先生、おはよう！二学期もたっぷりと虐めてやるからな！」

憂鬱な表情を浮かべるイケメン教師に大きな声でそう呼び掛けてきたのは、イケメン教師が担任するクラスの男子生徒、相葉であった。

担任するクラスのクラス委員である相葉に声を掛けられたイケメン教師はますます表情を曇らせ、酷く怯えているように見えた。それは教師と生徒というよりもむしろ奴隷と主人の関係のように映り、イケメン教師の置かれている複雑な状況を窺わせた。

それから、登校してきたイケメン教師の姿を目撃した生徒達は皆、なぜか意味深な笑みを浮かべ、その体を舐め回すように見つめた。

二学期の始業式の朝、生徒達からギラギラした視線を向けられているそのイケメン教師は、二十五歳の高校教師、三神真琴であった。

教師にしておくのがもったいないほど端整な顔立ちをした真琴は、一学期の初めまでは学園のアイドル的存在だった。

しかし、今年度から高校一年生の担任を受け持つことになった真琴は、一学期のある日、担任するクラスの生徒達から罠に嵌められ、自身のあまりに恥ずかしい盗撮動画をネタに脅迫されるようになった。そして、生徒達の

奴隷として一学期から夏休みにかけての間、数々の屈辱を味わうことになったのだった。

真琴は正直もう教師を辞めようと思っていた。しかし、夏休みに自身の弱みを握る生徒達から散々脅迫され、教師を辞めることさえできなかったのだ。

夏休みが始まってすぐに行われた臨海学校では、真琴は衆人環視下の海辺で素っ裸にされた挙句、生徒達から体中のミルクを搾り取られることになった。その後も夏休み中、毎日のように高校に登校して生徒達の前で全裸ランニングや朝礼台の上でのオ〇ニーショーなどを強要されたのだった。

だから、真琴は二学期がはじまるのが憂鬱で仕方なかった。二学期は学校行事も多く、そうしたイベントで生徒達から辱められると思うと、とても生きた心地がしなかった。

真琴が憂鬱な面持ちのまま職員室に入ると、他の同僚教師達は意味深な表情でイケメン教師を見つめた。夏休みの臨海学校に共に同行

した教師達は、真琴が生徒達の前で全裸オ○ニーショーなどの過激なプレイの数々を披露したことを良く知っており、他の教師達は夏休みの高校の校庭を全裸でランニングするイケメン教師の姿を何度も目撃していた。だから皆、若きイケメン教師のことをド変態の淫乱教師として好奇と軽蔑の入り混じった目で見ていたのだ。

「三神先生、二学期もその逞しい体で学園を盛り上げてくれることを期待してるよ（笑）」

「もう先生が露出狂だってことは学校中みんなが知っているから、遠慮なく露出プレイをしていいぞ（笑）」

「ただ、所構わずミルクを発射するのだけはやめてくれよな（笑）」

先輩教師達は早速イケメン教師を冷やかし、真琴が羞恥に咽ぶ姿を見て楽しんだ。

同僚教師達にまですっかり変態扱いされてしまった真琴は、もはや学校の中に味方になってくれる人は誰もいなかった。職員室の中

にいても、学校の廊下を歩いていても、教室で授業をしていても、欲情に満ちた熱い視線が全身に突き刺さるのを感じずにはいられなかった。一学期に見た自分の裸を皆きっと頭の中で想像しているに違いない、そう思うと、真琴はズボンの奥でイチモツを恥ずかしいほど大きく膨らませてしまった。

一学期の間にイケメン教師をすっかり奴隷として手なづけた真琴のクラスの生徒達は、夏休みを経て二学期になると、ますます加虐心を高ぶらせ、担任教師を徹底的に辱めてやろうと企んでいた。

担任するクラスでの授業の時には相変わらず全裸を強要し、授業の後半には教卓の上に座らせてオ○ニーショーを披露させた。真琴はもはや生徒達に抵抗する事もなく、ただ従順にその命令に従い、教卓の上で何度も射精を果たしたのだった。

さらに放課後になると、他のクラスの運動

部の生徒達を交えてイケメン教師の調教が行われ、真琴は夏休みの時と同じように校庭を全裸で走らされた。

同僚教師達はその姿を見てもただ面白そうに眺めるばかりで、誰もイケメン教師をいたぶる生徒達を注意しようとはしなかった。むしろ、イケメン教師が生徒達にもっと辱められることを望んでいるようにさえ見えた。

そうして、二学期になるとイケメン教師はますます学園の性奴隷と化していき、生徒や同僚教師達は皆、イケメン教師のより卑猥で過激なプレイを期待するようになっていった。

そんな二学期が始まって二週間が過ぎた九月中旬、真琴のいる高校では毎年恒例の水泳大会が行われることになった。校庭の隅にある屋外プールに全校生徒が集まり、クラス単位で水泳競技を競うのだが、運動会と違ってある種のお祭りのような雰囲気の大会であった。生徒達はこの水泳大会で大いに盛り上が

った後に、ようやく夏休みの余韻が抜け、学校生活に打ち込むことができるようになるのだった。

そんな水泳大会が行われる当日の朝、真琴はいつにも増して浮かない表情を浮かべていた。なぜなら、真琴は今日の水泳大会でクラス委員の相葉達が用意した水着を着用しなければならなかったのだ。

きっと相葉達は自分を全校生徒の前で辱めようと考えているはずで、今日渡される水着も卑猥なものに違いなかった。真琴はそれを想像するだけでどうしようもない羞恥と不安に襲われ、正直天気が荒れて水泳大会が中止になることを昨日からずっと願っていた。

しかし、真琴のそんな願いを打ち砕くように今朝の空は雲一つない晴天で、真夏を思わせる蒸し暑さだった。これだけ天気が良ければ水泳大会は大いに盛り上がるに違いなく、哀れなイケメン教師がその主役となるのは容易に想像ができた。

真琴が職員室の自分の席にやって来ると、机の上に一通の封筒が置いてあった。もしかして・・・。それを見た真琴は不意に嫌な予感がして、その封筒をすぐに開けて中身を確かめた。するとそこには一枚のメモ用紙と共に、水色の布切れのようなモノが入っていたのだ。

『先生が水泳大会で着る水着です。今日はこれを着ておもいっきり全校生徒を楽しませてください。それからプールには何も持たずこの水着一丁で来るように』

メモ用紙にはそう記され、クラス委員の相葉が書いたものであることがすぐに分かった。

あぁっ、どうすればいいんだ・・・。分かっていた事とは言えいざ現実となると、真琴は激しく動揺した。水色の布切れは生地の面積がかなり小さい水着で、こんなモノを着て全校生徒や同僚教師達の前に出なければいけないのかと思うと軽い目眩を覚えた。

それでも、クラスの生徒達に自身の恥ずか

しい弱みを握られて逆らう事のできない真琴は、それを穿くしかなかった。真琴は慌てて教職員用のトイレに駆け込むと、個室の扉を閉め、早速その水着を穿いてみることにした。

水色のビキニは想像以上にサイズが小さく、お尻の割れ目が少しはみ出してしまい、前もう少しで恥毛が覗いてしまいそうな危うさがあった。そして、生地の薄い水着の奥では大きなイチモツがクッキリと浮き上がり、その形や大きさまでハッキリと窺い知る事ができた。

あぁっ、恥ずかしい・・・。水着を穿いた真琴は激しい羞恥に悶え、こんな恰好でプールサイドに立たせようとする相葉達を心から恨んだ。

而して、真琴は水着の上にズボンを穿き、そのまま職員室へと戻った。廊下を歩いていると、ズボンの奥で水着が股間に擦れるのが分かり、真琴は嫌でも背徳感に襲われた。さらに廊下ですれ違う生徒達に、この後プール

サイドで自分の恥ずかしい水着姿を見られるのかと思うと、どうしようもなくやるせない気持ちになった。

二学期最初の校内イベントである水泳大会は、始まる前からイケメン教師を羞恥と不安に震え上がらせ、新たな地獄が待ち受けている事を予感させた。

どうか何事も起きませんように・・・。真琴は心の中で必死にそう祈り続けた。しかし、イケメン教師の切なる祈りは通じることなく、全校生徒の前で新たな羞恥劇が巻き起こることになるのだった。

■海老沢薫　ＢＬＯＧ

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・連載小説『イケメン社長　聖哉２５歳―体を賭けた屈辱の取引―』や最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195

・・・二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドル的存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罠に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝　二十歳の憂鬱』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764

・・・大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステージ上で罠に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。

それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。

数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。

今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステージ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることにな

り・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をすることになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、一糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていき、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。